
New Age Beginning

淡太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

New Age Beginning

【Zコード】

N4959S

【作者名】

淡太郎

【あらすじ】

もし、あなたが常識の枠を覆す出来事に遭遇したら
どう対処し行動しますか？

それはあなたにとって困難なことですか、それとも素敵なことです
か。

そんな出来事に直面している男の物語を紹介いたします。

そこに少しばかりSFというエッセンスを加えております。

「[http://awataro-sroom.lingot](#)」（英文）にも掲載中

第一章・侵略組曲（一）（前書き）

喧騒とした慌しい日常よりほんの少しだけ現実を忘れ、自由に想像を膨らませ空想の部屋へお越し下さい。お付き合いいただけるひとときの間、あなた様はどのような夢を見ていただけますでしょうか。

第一章・侵略組曲（一）

今日もどんよりとした鉛色の雲が空一面を覆いその重たい雰囲気のなか、あたかも我慢できなかつたように大粒の雨が降り続いている。雲の中からは、ごろごろと恐怖感を募らせる音が鳴り響き、その都度けたたましい音とともに稲妻の閃光が走り空を切り裂く。容赦なく降り続いているこの大雨は休むことなく一ヶ月以上となる。気象庁の発表によると今年の梅雨は全国的に異常なほど降水量が高いという。そんな激しい雨のなか一人の男を乗せた新幹線は東京に向かつて猛スピードで走っていた。

人かず少ない自由席の一一番最後の座席に隣りあわせで腰をかけこれといった会話も交わすこともなく、二人の間にはただ時間と窓から見える景色だけが流れていった。窓際に座る男は、デニム姿で足を組み、窓を眺めただ何気に雨に濡れる景色に目を向けていた。通路際に座る男はくたびれた背広姿で俯き、何かにおびえる様に体を震わせていた。一人とも無言で喋りだす様子もなく一見してみれば、ただ合席に座つた赤の他人のように見える。しかし共通していえるのは一人とも砂ぼこりのついた薄汚れた格好だということだ。

そんな静寂を突き崩すように窓際の男に動きがあった。彼はおもむろに胸ポケットから煙草を取り出し一本くわえ火を点けた。土砂降りの雨に浮かぶ景色に虚ろな視線を向けゆっくりと煙を吐き出した。

「雨やまないよなあ」

窓際の男が再び静寂を破り口を開いた。そのつぶやいた言葉は、その男にとって雨が止もうが止まいかどちらでもよいことであつて特に問題ではない。無意識にぽつりと出たのであらう。

「止む気配さえないな」

煙を吐き出しながらつぶやいた。どうやら無意識でなく隣に座る通路際の男を意識しながらつぶやいている様子だ。

「こんな天気じゃ」一いちまで嫌になつてくるよなあ

煙草を吸いながらつぶやいている。その間隣に座る通路際の男は微動だにせず、俯き屈み込んだままでいる。

「いまどきの辺りだ」

窓際の男は窓に顔を近づけ覗き込んだ。

「ぜんぜん分からん」

目を凝らしてよく見たが流れいく雨に濡れた灰色の景色からは、今どの辺りを走っているのかうかがい知る術はなかつた。やがて窓際の男の視線は、窓に映る隣に座る通路際の男の姿に向けられた。その男は俯き黙つたままで先ほどと一向に変わっていない。そんな姿を虚ろな目で見ながら短くなつた煙草を吸い干して大きく吐き出した。煙は窓のなかに映る通路際の男をめがけかき消した。そして火種がフィルター近くまでにきている煙草を灰皿にもみ消し、隣に座る通路際の男のほうへ姿勢を変えた。

「もうすぐ東京だ」・・・づく

第一章・侵略組曲（2）（前書き）

前回のあらすじ・・・二人の男を乗せ新幹線は猛スピードで走っていた。二人の男の関係は・・・？そして目的は・・・？

第一章・侵略組曲（2）

窓際の男は俯き屈み込んだままでいる通路際の男に虚ろな目を向け、小声で言つた。期待はしていなかつたが反応は無かつた。

「いまだこを走つてゐるのか分からぬが、あれからかれこれ三時間にはなる。もうそろそろ着いてもいい頃だらう」「ひうまつたくなんの反応も無いのに心細くなつてきた。

「しかし雨よく降るよなあ。稻光までしているぞ」

通路際の男は黙つたままでいる。俯いた姿勢を崩さず微動だにしない。そんな姿を見ては、だんだんと自信なさげになつてきた。

会話にならず独り喋つてゐるのが嫌になつたのか、窓際の男は再び窓に流れいく雨に濡れた景色に虚ろな目を向け、肘をついた。

雷光が走り、強い雨が容赦なく窓を打ちつける。一向に変わらない外の天候を何気に見ながらふと思つた。

「真つ暗だ」

時折の雷光で一瞬明るくはなるが何も無い闇の世界が広がつていた。今まで見ていた鉛色がかつた景色がもうそこには無かつた。その闇の世界に土砂降りの雨が降る。自分が乗つてゐる新幹線を一步出れば一寸先も見えない嵐のなかと思つと背筋が寒くなつた。

「まてよ・・・」

一筋の雷光が走りまたふと思つた。

「俺たちはどこからこの新幹線に乗つたんだ。隣に座つてゐる男は何者だ・・・」

肘をついたまま横目で通路際の男を見た。

「今まで何をしていたんだ。なぜ東京に向かつてゐるあらゆる疑問が脳裏を掠めていく。自分が誰なのかも分からなくなり、頭のなかが混乱してきた頃、現実に引き戻されるように通路際の男が口を開いた。

「熱いコーヒーをくれないか」

その言葉に驚いて反射的に振り向いた。

「熱いコーヒーを・・・。ミルクも砂糖もいれないで・・・

通路際の男は今までと同じ俯いた体勢でか細く言った。

・・・つづ

く

第一章・侵略組曲（۳）

「ああ・・・分かった」

拍子抜けした返事になつた。窓際の男は立ち上がり隣に座る通路際の男をまたぎ通路へと出た。その時遠く離れた自動ドアの扉が開きワゴンサービスが入つてきた。ウェイトレスは軽くお辞儀をしてワゴンを押して歩いてくる。

「丁度よかつた」

窓際の男は彼女を呼んだ。

「ホットコーヒーをくれないか。ブラックでふたつ」

学生のアルバイトだろうか、まだ幼い顔をしている。ウェイトレスは無邪気な笑みを浮かべ、弁当やおかしが並んだワゴンの蓋を開けそして思いもかけない物を取り出した。

「えっ！」

窓際の男はぎょとした。

「何をしているのかな・・・僕はホットコーヒーを注文したんだよ」

窓際の男の体は硬直している。

そのウェイトレスは無邪気な笑みを浮かべたままピストルの銃口を窓際の男に向けていた。

「からかわないでくれ！何の[冗談だ」

言葉が震えていた。

「コーヒーなんて飲んでいる時間なんてないわ。さようなら」

幼い顔のわりには低い声だ。

ウェイトレスは無邪気な笑みを浮かべたままピストルの引き金を引いた。鈍い衝撃音とともに銃口から火を噴いた。銃弾は一直線に窓際の男の心臓を貫いた。

「山崎・・・」

崩れ倒れた窓際の男のとつさに出た言葉だった。

薄れいく意識のなか通路際の男のほうへ視線を向けた。しかしそこには誰も座つてはいなかつた。次第に視界が狭まり意識が遠のいていった。

「ありがとうございました」

ウェイトレスは無邪気な笑みを浮かベワゴンをもと来た方向へとまわし歩いていった。

そこには通路に倒れた窓際の男だけが残され、何もなかつたように窓には闇のなかから激しい雨がただ叩きつけているだけだった。

男はベッドから飛び起きた。

そこはいつも見る薄暗い部屋のなかだつた。部屋中を広がる独特的の薬の匂いがつんと鼻にくる。

「またあの夢か・・・」

体じゅうにじつとりとした汗をかいていたが、もう一度横になりそのまま深い眠りに落ちていった。・・・つづく

第一章・侵略組曲（4）

今日も朝の日差しが眩しい。夢のなかの天気と違つて雲ひとつない空が毎日続いている。

今年は空つ梅雨だ。

男は大きく背伸びをしてベッドから上半身だけ起き上がり、すぐ横にある窓から中庭の景色を眺めた。中庭の周り全体は常緑樹が生い茂り鮮やかな緑を醸しだしている。地面には芝生が敷き詰められ、その中央には何かのオブジェを象った大きな噴水があり勢いよく水を噴き上げている。そこには朝の新鮮な空気を吸いに出てきているのか数人の患者の姿も見受けられた。

ベンチに座り新聞を読む者、芝生の上に寝そべる者、ただ散歩する者とさまざまだが思い思いの時間を過ごしている。

体を癒すにはもってこいの環境だ。

つぐづぐやう思つた。窓から見える自然の緑に心を和ませ静かに時間が経つのを楽しんでいるとそこに聞きなれた明るい声が部屋へ入ってきた。

「おはよひでございまーす。あら、また嫌な夢みたのですか？」

いつもの看護婦がえくぼをつくりついていた。

「なぜ分かる？」

「パジャマが汗でびしょびしょ」

あの嫌な夢をみた朝は日覚めが悪い。それが汗で湿ったパジャマの所為だと思うと納得する。

「この検温が終わつたら早くシャワーを浴びてうつしゃい」

そう言って体温計を渡した。

「新しいパジャマも置いておきますからね」

汗で冷え切つた体に浴びる熱いシャワーほど気持ちよいものはない。じめつとした感触がその勢によく出るお湯によつて流され爽快感が

よみがえつてくる。

新しいパジャマに着替え中庭にて芝生に備え付けられているいつものベンチに腰をかけ、たばこに火をつけ思いにふける。いまのところそれが日課になつていて。そんな繰り返し続けられる日々がもう一ヶ月にもなる。たばこを吹かし縁一色に包まれた木立を何気に見ながら、ふと今までの自分の人生を振り返つた。

男の名前は板倉一郎、歳は三十歳。大手企業のビジネスマンとして第一線で活躍していたのだが、これからという時に過労で倒れこの小高い丘にある病院に運ばれた。当初気を失い気がついたときにはベッドの上だつた。それから何日もしないうちに薄い封筒が会社から送られてきてリストラされた。仕事を生きがいにしてきた自分としてみれば大変ショックだつた。また会社からみれば利用価値が無くなればいらぬ存在になる。ただ過酷な競争に敗れ使い捨ての駒として扱われただけだつた。

「不運な末路だ」

口からぼそつとでた。入院して以来ひとりも見舞いにも来てはいない。

気がつくと中央のオブジェの噴水を何気に眺めていた。止め処となく噴出している大量の水が今までのことを洗い流してくれるようないいを心によせた。

「たばこどこまで吸つているんですか」

いつもの愛らしいえくぼの看護婦が横から急に顔を出した。

「あちっ！」

たばこの灰が長く垂れ下がり火種がフィルターまできていた。

「たばこやめてくれるつて約束しませんでした？」

彼女の名前は遠藤広子、歳は二十六歳。担当看護婦として板倉の面倒をみている。

「あの日はやめたのだよ」

「一日やめただけじゃ駄目です。ずっと続けなくちゃ」

彼女の顔からえくぼが消えていた。少し怒つているようだ。

「明日からやめます・・・」

それからひと時たわいもない世間話をした。

板倉の入院しているこの病院は都会の雑踏を離れた山のなかにある。古い教会を改装したのか総合受付になる玄関は高く伸びたつ時計塔となっている。天辺には大きなチャペルの鐘が吊り下がり一時間ごとに鳴り時を知らせる。その入り口からなかに入ると真正面に縦長の大きな聖母マリアのステンドグラスがはめ込んで在り、来る者の心を落ち着かせてくれる。

その先は四本の渡り廊下が扇状に延びてあり各専門の棟へと繋がっている。そのひとつリハビリセンターに板倉はいる。

遠藤と別れたあと、ぽかぽかとした気持ちのよい暖かい日差しに包まれ、ついうとうとそのままベンチで転寝をした。

「コーヒー・・・」

「えっ！」

気がつけばまた新幹線の中にいた。・・・つづく

第一章・侵略組曲（5）

「熱いコーヒー……買つてきてくれないか……。ミルクも砂糖も入れないで……」

またいつもと同じ場面だ！ひとり氣の少ない自由席車両の一一番最後の座席に座り、窓には激しい雨が叩きつけられ、隣の座席には山崎という名の男が肩を落として座っている。

いきなりのその状況に驚いてしまい窓際の男である板倉は拍子抜けした返事をした。

「ああ・・・分かった・・・」

そのままいつの間にか腰元で座る山崎の前を跨ぎ通路へと出た。

変わることなく幾度も同じ動作が繰り返される。

「温かいの買つてくるから待つていろよ」

そういうと服に付いている砂ぼこりを叩き田の前の自動ドアに向かつた。

その時・・・。

「有沢！そつちじやない！」

突然山崎が怒鳴った。それに驚き反射的に振り返ると何かを訴えかけるような眼差しで睨みつけていた。

「ああ・・・そうだったな・・・」

山崎のその鋭い視線と表情に恐れおののき思わず一歩あとずさつた。そしてその時初めて自分の名前が有沢ということを知った。

「じゃ、買つてくるよ・・・」

ぎこちない返事で山崎を促し進行方向へと足をかえた。

頭のなかではあらゆる疑問が渦巻いている。自分自身が何者であるのか。あの山崎とどういう関係があるのか。何故先ほどの方ではいけないのだろうか。あの男は何を隠しているのだろう。ましてや新幹線の中にはいる自体不思議でならなかつた。訳のわからないまま、

もやもやとした気持ちの悪いものを感じた。そんなわだかまりの残るなか、ゆっくりと空席が田立つ座席を見渡しながら歩き出した。

そこには数名の乗客が一定の間隔をあけ座っていた。

ビジネススーツで身を包みノートパソコンをしきりに打つ青年。くたびれたジャケットを無造作にはおりいびきをかけて眠る中年男。駅弁を一心不乱にむさぼる老婆。誰しもが自分のテリトリーを守っているような感じだつた。そこへ電子音の音が耳に入りその方向を覗いてみた。そこには野球帽を深くかぶつた小学生くらいの少年が一人で静かにゲームをしていた。

「ここはいつたいどこなんだ・・・」

穏やかに時が経つ。有沢という名の自分。脈絡のない新幹線の中といつ場面。目的さえも分からぬ。よつやく車両を結ぶ自動ドアの前まで来た。自分のいた座席からここまでかなりの時間がかかったような気がする。そこから車両全体を眺めてみた。立つている足元にはいま歩いてきた通路が長く伸びており、その両側には空席の目立つ座席が通路に沿つて並んでいる。まぶたを閉じればこの空間と同化して深い眠りに落ちてゆく。。。そんな錯覚さえ覚える。

目を閉じてその時間が止まったような空間を全身で味わつていると、不意に背を向けていた後ろの自動ドアがゆっくりと開いた気配がした。

「うつ・・・」

小さな熱いものが背中から体の中へ物凄いスピードで貫いていった。体が徐々に重くなつていぐ。目の前に地面が近づいてくる。体中に激しい痛みを感じ長く伸びる通路にスローモーションをかけたようにゆっくりと倒れこんだ。背中から胸へと開いた傷口からは赤いどうどりとした血が通路を染めていった。ゆっくりと首を後ろに回し背後に立つ者を見上げた。

そこには銃口から煙の出たピストルを手にしたあのウエイトレスが微笑みながら見下ろしていた。

「残念ね、ここまで来て。もう少しだったのに・・・」つづく

第一章・侵略組曲（6）

「なんのことだ……」
その言葉を言つのが精一杯だった。呼吸をするのが辛くなつてきて
いる。

「…………」

ウェイトレスは笑いながら何かを言つたが聞き取ることができなか
つた。

しきりにくる激痛を抑え山崎のいる座席に視線を変え這いずつて行
つた。しかし体から出た血が滑り思うように進めないが這い蹲りな
がら前へ進んでいった。這いする有沢の後にはまるで大きなナメク
ジが歩いた後のように赤い血が尾を引いていた。

「もう少しだ！」

自分を励ますように声にして言つた。

ほかの乗客たちは有沢のその行動を無視するかのように見知らぬ顔
で今さつきと同じ動作を繰り返している。

こいつら……どういう神経しているんだ……。涙を流しながら乗
客たちの顔を見上げた。

ノートパソコンとやらめつゝしている者。高高いびきを搔いてぐー
すか熟睡に耽る奴。ごはんを一口ずつ味わつて食べる婆さん。誰し
もが皆お構いなしの雰囲気だ。

唇をかみ締め涙を呑み、よつやく自分がいた座席までたどり着いた。
涙でぼやける視線の向こうには座席に座る山崎の足が見える。血ま
みれの右手を大きく伸ばし見上げた。

「山崎……」

そこには冷たく青ざめた山崎の姿があった。その変わり果てた姿に
愕然となり、伸ばした右手が力尽き落ちた。

「どうして……誰がこんなことを……」

悔しい思いを感じた。体じゅうの力を振り絞りここまでたどり着い

たというのに・・・。血まみれの両手にじぶしをつくり通路を叩いた。止め処となく涙があふれ出る。やがて小さな影が自分の前に立つていることに気がついた。小さな運動靴が目に入る。見上げていくと次に半ズボンを履いた幼い足がみえる。そこには半そでシャツを着て野球帽を深くかぶった先ほど電子ゲームをしていた少年が立っていた。

「僕だよ、おじちゃん」

有沢はその少年の顔をまじまじと見た。

「き！君は・・・！」

目がかすみ意識が薄れてきた。急に社内を照らしていた照明が点滅しあじめ、頭のなかではざわめいた落ち着きのない雜音が鳴り響いてきた。そのうち照明が消え有沢の意識とその車内は暗闇に包まれた。

ベッドから身を起こしうなだれている板倉がいた。パジャマがまとわりつぐぐらい体いっぱい嫌な汗を搔き肩で息をしていく。鼓動を早く打つ音だけが大きく響いている。時計は午前三時を指し、薬の匂いが充満するいつもと変わらぬ薄暗い自分の病室だつた。

「のどが渴いた」・・・つづく

極度ののどの渴きをおぼえ、ゆづくつとベッドから立ち上がった。汗を含んだパジャマがべつとりと体に付着する。半分脱水症状を起こしているのか、ふらふらと廊下に出た。冷水機のある方向へと意識もうろうになりながら歩いていく。たどり着くと同時にスイッチを押し冷水をがぶ飲みした。冷たい水がのどを潤す。のどの渴きが満たされるとそばにあつた長いすに腰を掛け放心状態になった。そして物思いに耽つた。

有沢という名のもう一人の自分。あの新幹線での出来事。物に触れる感触も伝わつていいし、目に見たものも鮮明に覚えている。これが夢というものの成せる業なのだろうか。

考えることは夢のことばかりである。

あの少年は誰なんだ・・・。彼を知っていた・・・。山崎との深い繋がり。そして命を狙うウェイトレスに他の乗客たち。関わつてくれる夢のなかの登場人物は有沢という名の自分にどうこう影響を与えているんだ。

答えが出てこない。だんだんと頭が痛くなってきた。俯き両手の中指でこめかみを押さえる。

それにこの夢は田を増すごとに少しづつ変化している。同じ繰り返しじゃない。しかしその先が見えない。もう少しのところで夢から覚める。あの車両の次には何があるんだ。まぶたを閉じこめかみを撫ぜた。

この夢を見だしたのは病院に入院してからだ。ここに来てから何日経つだろう。あれから・・・あれから・・・。までよこの病院に来る前は何をしていたんだ・・・。そうだと会社に勤めていたんだ。なんの会社だ・・・。そこで何をしていた・・・。過労で倒れた・・・。それはここへ来てから聞いた話だ。誰に聞いた。遠藤広子・・・。夢のことから現実のはなしに切り替わる。頭痛がひどくなる。両手

で頭を押された。

体を休め回復するためにこのリハビリの棟にいる。病に冒されたわけではない。なのに何故いつも部屋には薬の匂いがするんだ。そして今日は昼にもならない時間にベンチの上で寝込んでしまったはずだ。あれから何時間経っているんだ。

両手で髪の毛を握る。夢のなかの自分も現実の自分も存在が分からなくなってきた。ましてや何故ここにいるのかも思い出そうとしても思い出せない。曖昧な記憶だけが脳裏をかすめる。

誰が部屋のベッドまで運んだのだろうか？

遠藤広子の顔が頭に浮かぶ。少し頭痛も治まり首を後ろにもたげ天井を見上げた。

たぶんそうだろ？・・・。ひろちゃんか・・・。器量よしのえくぼのかわいい看護婦さん。またよ・・・、病院関係者は彼女しか知らないし、他に会つてもいない。なぜだ・・・。専属の看護婦とはいっていたがそれにしてもおかしい。医者もひとりは顔を見せていいはずだ。分からぬ・・・、頭のなかがもやもやする。明日相談してみることにしよう・・・。

まぶたを閉じ体の力を抜く。そしてそのまま深い眠りについていった。それからどれだけの時間が過ぎただろう。汗を搔いたまま寝た所為か、ぞくつとした寒気を感じ身震いして目が覚めた。するとそこには大きな黒い人影が目の前に立っていた。・・・つづく

第一章・侵略組曲（∞）

うつすらと夜が明けていく。窓からは初夏を感じさせる日差しが入ってくる。今日も一日気持ちのよい天気になりそうだ。しかし……、板倉の病室には彼の姿はなかつた。

「投身自殺ですか……」

「はい・・今日未明のことです……」

「なぜそんなことに……」

「原因は詳しく述べ分かりませんがノイローゼではないかと……」「残念なことです……。しかしここでしまったことは仕方ありません。私たちはやれるだけのことは尽くしました。悲しい知らせになりますがご家族の方に連絡を入れてください」

「それが・・親族や身内の方はいらしゃらないみたいで……」

「まあそれでは仕方ありません。こちらで対処いたしましょう」

「はい・・分かりました。では早速手配しておきます……」

「それから遠藤さん。急なことで大変かもしれないけれど気を落とさないでね」

「ありがとうございます……。院長」

そして遠藤広子は院長室を後にした。院長室の部屋の中には一人こげ茶色の革製の椅子に腰をかけたまま、悲しげな顔を両手で覆い机の上に両肘をつき俯く院長がいた。しかしその表情は暗い悲痛の面影から妖しげな笑みへと姿を変えた。幼い顔をゆっくりとあげ低い声で笑い声を高々と響かせた。

高く聳え立つ病院の上空には今まで晴れ上がった青空を覆い隠すように、鉛色の雲が静かに忍び寄り一雨ずつ激しく大地に降りつけていった。それは瞬く間に土砂降りの雨となり梅雨の始まりとなつた。またそれは混迷する人類の、晴れ間の見えない暗雲漂う湿つた梅雨の始まりだった。・・・第一章おわり

第一章・侵略組曲（∞）（後書き）

誰しもが一度は興味を持つ未知の世界、恐怖を感じながらその好奇心を駆り立てる。ただ空想のお話で止まらず自分自身に置き換えたらどうだろう。「次は我が身!」想像力を膨らませ、話の展開に没頭し、登場人物と一緒に物語のなかに同化していく。次回もこの部屋でお待ちしております。

第一章・種の絶滅（1）（前書き）

喧騒とした慌しい日常よりほんの少しだけ現実を忘れ、自由に想像を膨らませ空想の部屋へお越し下さい。お付き合いいただけるひとときの間、あなた様はどのような夢を見ていただけますでしょうか。

第一章・種の絶滅（1）

漆黒の闇の中。それは見上げるほどの大木とした高い樹木が生い茂る森と一緒にその存在を消すかのようにひつそりと姿を佇ませていた。それの周りには人の背丈ほどある雑草が敷き詰めて長い蔓が伸び、その姿を覆い尽くしている。長年の年月が偶然そうさせたのか、それとも故意にしたのか。まるで人目を避け見つかってはいけないかのように・・・。だが大きな満月が雲からゆっくり顔を出す夏の蒸し暑い夜、四人の若者たちによつてその沈黙は破られた。

「やつと見つけたよ」

「本当に在ったのね」

「なんか不気味だよな」

「やだ・・帰ろうかしら」

彼らの前には廃墟と化した大きな建物が聳え立つていた。彼らの視線はその建物に目を逸らすことなく集中していた。

「見事なものだな」

「怖いわ・・」

「私たちが見つけたのよね」

「じゃ、入つてみようぜ」

物音のない静寂の空気が包みこんでいた。ゆっくりと生暖かい空気が吹き出したころ彼らの持つた懐中電灯の光が揺れ動きだした。四人は自分の背丈まである雑草を掻き分け廃墟の建物に向かつて歩き出した。

「やつぱりやめましょ。私怖いわ」

そう言って望恵は立ち止まつた。

「なに言つてんだ、ここまできて。ようやく幻の心靈スポットを見つけたんだぜ」

悟がじれつたそうに言つた。

「入らず帰るなんて勿体ないぜ」

孝広がけし掛けた。

「もう、臆病なんだから」

良子があざ笑つた。

蒸し暑い夏の夜。誰も知らない森のなか四人の声だけが響いていた。彼らの前にはまるで彼らを待ち構えているかのようにそれはじっと静かに建っていた。

四人ともじめつとした汗を体中に搔いていた。それは熱帯夜の所為かそれとも今から向かう幽霊屋敷に興奮しているためか、いずれにせよ彼らの胸は高鳴っていた。

一步一步と四人が持つ懐中電灯の光が揺れその廃墟に近づいていった。彼らを待ち受ける恐怖が口を開けて待っているとは知らずに・・・

・・・づく

第一章・種の絶滅（2）

一見植物の薦が建物全体を包み隠し覆っているため分かりづらいが、間近で見るとその姿は想像以上に不気味を呈していた。玄関扉には無造作に張り合わされた板が招かざる訪問者を硬く閉ざし、壁は所々崩れ落ち鉄骨の骨組みが曝け出し、窓の硝子はすべて割れておりそこから誰か覗いてるような恐怖さえ感じじる。彼らはまだ見えないおぞましき魑魅魍魎と対面することも知らずに玄関の前まで来た。

「さあ、どうやって入るうか」

孝広が薦を掻き分けバリケードになつてている板を眺めた。

「こうやって入るんだよ」

悟が乱暴にその板を壊していった。長年の年月が経つてゐるため腐食した板はすぐに崩れ落ちバリケードの役には立たなかつた。うるさいぐらいの音が森じゅうに響いた。

「そんな事しちゃ祟られそうだわ」

望恵が怖々と怯えている。

「迷信深いわね。これで封印は解かれたわけね」

良子は興味心身だ。

顔を出した玄関の扉には赤いペンキで“立入禁止”と走り書きされていた。その文字は今の状況にぴたり当てはまり四人を盛り上げた。

「さて誰から先に入る」

「私は嫌よ」

「記念すべき一步だぜ」

「だつたら早くは入りなさいよ

数分そんな押し問答が続き四人一緒にそろつてノブを開くことにした。中から冷たい空気が四人に吹き付ける。体じゅうのじめつとした汗が急にぞつくとさせる。四人はゆっくりとその闇の中に呑まれていった。かび臭い匂いが鼻を吐く。なかに入るとほこりとくもの

巣が覆う大広間になつていた。暗闇に月の光が差し込むだけで薄暗くどうなつてゐるか全体を把握できない。四人は恐る恐る懐中電灯の光を思い思いの方向へと向けた。そこは多くの人が集まるような場所だつた。しかし腰をかける長いすは散乱し倒されていた。彼らは恐怖に駆られながら一步一歩奥へと入つていつた。

「ここはいつたいどうゆう所だったの」

「噂によると精神病院だつたらしいぜ」

「俺は秘密の研究施設と聞いたぜ」

「どつちにしてもただの噂ね・・・。ここは教会よ」

良子の照らした懐中電灯の光の向こうにはステンド硝子で彩られ、ほこりにまみれた聖母マリアがいた。その上には傾いた十字架が悲しげに彼らを見下ろしていた。・・・つづく

第一章・種の絶滅（3）

「ね！これみてよーー！」

三人から少し離れた望恵が大きな声を出して皆を呼んだ。

「19・・年、6月・・。私たちが生まれるずっと以前じゃない！」
そこには色あせ破れたカレンダーがぶら下がっていた。その下にはダイヤル式の赤い公衆電話がほこりで真っ白になっていた。
「うわっ、年代物だな。」

「こんな電話初めて見たわ」

「しかし教会にカレンダーと公衆電話つておかしくないか」「やつぱりここ病院よ」

望恵がかざした光に「院内総合受付」の文字が照らされた。それと同時に今までのかび臭い匂いが急に消毒剤の匂いに変わった。

「何この匂い！」と良子

「どうした」と孝広

「病院の匂い・・・」と望恵

「病院の匂い？」と悟

その病院の匂いはすぐに退いていき元のかび臭い匂いに戻った。

「あつあれ・・」と良子

「なんだ」と孝広

「いま一瞬病院の消毒の匂いがしたのよ」と望恵

「ま・・まさか・・・」と悟

四人の背筋に悪寒が走り夏だと「元のかび臭い匂い」に戻る。

「俺はわからなかつたぜ」と孝広

「俺もだ」と悟

「私たちにはしたのよ」と良子に望恵

四人は恐怖に怯え動けなくなつた。

「やつぱり帰りましょうよ」

望恵が体をくねらせ、ねだつた。・・・ついで

第一章・種の絶滅(4)

「これ何かしら・・・」口にも

良子が不自然なものを見つけた。

その受付カウンターの両側の壁には暗がりでも一見にして分かる何かをコンクリートで塗りふさいだ跡があった。

「この奥にも何かあるんだ」

「向こうにも2つ・・・全部で4つある」

望恵は三人の後ろで震えていた。

「壊してみようぜ」

悟が背中に背負ったリュックからハンマーを取り出した。

「100%祟られるわよ」

良子がそう言つてゐる間に悟はハンマーを振りかざしふさがれた1つの壁を崩していった。やはり中は空洞なのかすぐに白い粉煙をあげぼろぼろと崩れていた。大広間にとてつもない音が響きわたる。

「おいやめろよ！」

「す、いほこりよ！」

「もうひとりだ」

悟の額からは大粒の汗がたれ落ちている。今まで鳴つていた騒音がさつーと退いていく。ぽつかりと開いた穴からは暗黒の闇が広がつていた。三人はその闇に釘付けになった。

「この向こうに何があるんだ」

孝広が懐中電灯を照らしたが光が届かない。

「結構奥が広そうね」

良子が目を見開いた。

「何かいそだな」

悟は力を出し尽くし肩で息をしていた。

「ちょっと・・・」

後ろに立っていた望恵が小さな声をあげた。また消毒剤の匂いが広

がる。三人は気づいていない。

「ちょっとってば・・・」

望恵は何か得体の知れない気配を感じていた。消毒剤の匂いが腐敗した腐った匂いに変わる。三人はまだ気づかず穴の向こうに広がる闇を見ている。

「何かいる！」

「えつ・・・」

「何か動いたような気がしたんだよ」

「ねー！ちょっとー！」

望恵の声がようやく届き三人は振り返った。

望恵は恐怖に身をゆだね全身を振るわせていた。そのひとつは望恵の間近にいた。大広間のいたるところから集団で集まつてくる。それらはふらふらとおぼつかない足どりでしかし確実に四人に近づいてきた。振り向いた三人は腐敗した匂いと恐怖に駆られ声も出ず動けなくなっていた。その瞬間・・・。望恵の首が飛んだ・・・。

三人の顔が青ざめた。しがみつき体を震え上ががらせる。目の前で望恵が死んだ。望恵の硬直した首のない体だけが目の前で立っている。腰を抜かす三人にそれは徐々に周りを囲み間隔を狭めていった。

「きやーー！」

「つるつさいわね。耳元で大きな声たてないで！・・・つづく

第一章・種の絶滅（5）

良子はハンドルを強く握り締めた。

「それからどうなったの」

望恵は怖いもの聞きたさだ。後部座席には聰子が耳をふさぎ田だけは見開いている。

「さあ・・行方不明・・らしいよ」

良子と望恵、聰子の三人は女だけの温泉旅行で車を走らせていた。最初は流行の音楽を楽しんでいたが、ひょんなことから怪談話に変わっていた。

「それって本当なの・・」

聰子が後ろからか細く聞いてきた。

「嘘に決まってるでしょ。噂話、都市伝説よ。・・・そりなんじよ・・・」

望恵が良子に聞いた。

「怖がついていたくせに。私も聞いた話でどうか分からぬわ

車は夏の日差しが強い田舎道を走っていた。聰子が何気に窓を開けた。同時に勢いよく湿気じみた熱い風とつるさいくらいの蝉の鳴き声が車内に入ってきた。

「何やつてんのよ！早く閉めなさいよ！」

望恵が怒鳴った。冷房で冷めきった車内が一挙にサウナに変わる。

良子がエアコンのボリュームを強めた。

「どこのでなぜ私の首が刎ねられたわけ」

望恵がいやみっぽく良子に尋ねた。

「それは話のなりゆきで・・・」

「私たち三人が登場しているのは分かるけど、孝広って誰よ

望恵が続けて尋ねた。

「さあ・・想像上の人物・・?」

良子が「」まかした。

「ねえ・・・」

聰子がまたか細く前の二人に問いかけた。良子と望恵は話で出でた男のことで騒いでいる。

「ねえ・・・って・・・」

前の二人はまだ気づいていない。

「ねーー・ちょっとーー！」

良子と望恵はようやく気づき、望恵が振り返り良子はルームミラーから聰子を窺つた。

「何よー！」

聰子は窓を眺めていた。

「いまのお地蔵さん2回田よ。同じ同じ走つてるんじゃない・・・」

「そういえば・・・」

良子がまじまじと景色を眺めた。

「だからナビ付にしたらよかつたじゃない！」

「無いほうが安いっていったのあんたでしょーー！」

良子と望恵がレンタカーのことで言い争いを始めた。

「あー、また。これで3回田よ」

聰子が窓から流れる地蔵を見て言つたが一人はそれどころではない。
「あー、また。もう何回同じどこ走つてるのよー早く温泉は入りたいのにーー！」

聰子の大きな声に良子は急ブレーキをかけた。

「地図みましょー・・・つづく

第一章・種の絶滅（6）

良子が地図を見て探している間、望恵は携帯電話で旅館に電話した
が圏外になっていた。聰子は静かに窓から地蔵を相手ににらめっこ
している。

「分かったわ。その先を曲がって細い路地に入るのよ」

「大丈夫？ 方向音痴なんだから。なんだか乗り物酔いしてきたわ」
望恵がまたいやみつぽく言つた。

「こんどこそ大丈夫よ」

良子がアクセルを踏んだ。聰子の顔はにらめっこのままで車は動き
出した。すこし走り曲がったところで細い山道に入った。その目の
前に小さなトンネルが口を開いていた。青いこけが入り口の周りを
多い尽くし長い間車の通行が無さそうな古ぼけたトンネルだつた。
良子は別に何も思わず突入した。なかは真っ暗で車一台分の道幅し
かない。また舗装された道路ではないので搖れが激しい。表面は山
肌がむき出しである。

「す」「いわね・・・」

良子は車のライトを上向きにした。

トンネルは意外と長かった。なかなか出口が見えない。

「こんなところでとまらないでよ！」

「変なこと言わないで！ 私だって早く出たいんだから」

良子は望恵に念押しされヒステリックな口調になつた。聰子は目を
大きく開きびくびくしている。三人が不安になつていてどうやらく
へ出口が見えてきた。

「見えてきたわ。ようやくね」

三人は不安な時間から抜け出し心からほつとした。しかし・・それ
もつかの間。トンネルを出ても外は真っ暗だった。良子はとつさに
ブレークを踏んだ。

「ここまで明るかつたよね・・・」

良子はハンドルを握つたまま体が固まっている。

「まだお昼過ぎのはずよ・・・」

望恵は腕時計の時間を確かめた。

「また道に迷つたの・・・」

聰子はか細い声で問い合わせた。

そこは夜だった。寂しい山のなかの夜の世界だった。三人の頭のな

かは混乱していた。・・・つづく

第一章・種の絶滅(7)

「いつたいどうなつているのよ…」

「ここはどこなの…」

「どうでもいいからはやくもどりましょうよ…」

狭い車の中は三人の叫び声で共鳴していた。パニック状態になつていた三人だが聰子があとの二人より先に冷静を取り戻し元来た道を振り返つた。そこにはさつき通つたトンネルは跡形もなく消えていた。いち早くそのことを知つた聰子は震えながら涙を流した。

「もう一度戻つてさつきのトンネルからやり直せばいいのよ」

良子がそう言つてバックにレバーを入れ後ろを振り返つた。そこには聰子の後姿と何もない夜の山の景色が広がつていた。

「どうなつてているのよ…」

良子は困惑して肩の力が抜けどうすることも出来ない苦悩を感じた。その時、放心している良子の腕が横から引っ張られた。

「ちょ・・ちょっと・・・」

隣の望恵が震えながらフロントガラスを指差し遠くを見たまま良子の腕を引っ張つていた。放心状態の良子の視線はその指差す方向をゆっくり追つていった。そしてそれを目にした途端、急に我に返つた。そこには良子が今さつき話した怪談話に登場した廃墟の建物が目の前にあつた。

「もう一度戻りましょう…」

「どうやって戻るのよ…」

「とにかくここから逃げるのよ…」

車は勢いよくバックした。その拍子に何かにぶつかつたがお構いなしに逆方向にハンドルをきり猛スピードで走り出した。三人を乗せた車以外は誰もいない真っ暗な山道を車のライトを上向きに切り替えたまま走り続けた。三人とも今起こつてゐる出来事から逃れることに必死なのか無言で体は固まつていた。

「ねつ！この道であつていいの」

望恵が前を向いたまま小声で良子に問いかけた。体はまだ硬直している。

「分からぬわよ！」

良子は長く続く真っ暗な山道を目をそらすことなく少し怒り口調で答えた。どこに続いているか分からぬ真直ぐな山道が永遠と延びている。今はただひたすら走り続けるしかなかつた。

聰子も後部座席の真ん中の位置に座りライトに照らし出される前方を見ていた。後ろを振り向くのが怖かつた。三人とも前だけを見ていた。

しかし聰子は何気に横の窓の景色をゆっくり視線を変え伺つた。ぎょつとして目を見開いた。もう一度即座に前を見た。そしてもう一度恐々と確かめるように横の窓を見た。前の一人は真直ぐ前を向いたままそれに気づいてはいない。

「おねえちゃん・・・」

聰子は泣きそうな声で前の二人に問いかけた。

「何よ！どうしたの？」

望恵は前を向いたまま聞き返した。

「この車動いてない・・・・・づく

第一章・種の絶滅(8)

「えつ！何言つてんのよー走つているでしょー！」

良子は目を見開き前を向いたまま大声で言った。

「聰子が言うとおり動いていいわ・・・」

望恵が視線を横の景色に向け呆然と言つた。

車はどこに続いているか分からぬ一本道をやみくもに走つている。猛スピードで回転するタイヤが土石を蹴散らしている。確かに車は前に進み走つている。しかしそれは前方のフロント硝子に映る景色だけで後の周りの景色は止まつたままだつた。良子がスピードメーターに目をあらすとそのままエンジンは回転していなかつた。それに気づいた瞬間、車のライトは消え闇に包まれた。今まで走つていたという感覚はまったくの錯覚だつたのだろうか。

「私たちどうなつちやうの・・・」

「もう嫌よここから出してー！」

そこは廃墟の建物が行く手をさえぎる元いた場所だつた。恐ろしいほどの静寂と満月の月の光だけが三人の乗つた車と廃墟の建物を照らし出していた。

「もうここから戻れないの・・・」

聰子が悲しげに聞いてきた。

「わからないわ・・・なにもかも・・・」

良子がまた放心状態でつぶやいた。

「ちよつと・・何、この匂い・・」

望恵がそれに気づいた。エアコンの通風孔から入つてきていくようだ。

「病院の匂い・・・」

森がざわめいた。それらは三人が気づかぬうちにふらふらとおぼつかない足どりで森のいたるところから車に近づいてくる。

車の脇には先ほど聰子とにらめっこをしていた地蔵が倒れ三人を眺

めている。

満月の月の光は赤く降り注ぎこれから起ころる惨劇を静かに照らしていた。

「きや——！」

「それでその怪談話の結末はどうなったの・・・」

「私も詳しくは知らないんだけど、その三人つて言つのは珍しい一卵性の三姉妹で顔は三人とも同じだったの。・・で誰か一人はその廃墟に吸い込まれるように入っちゃって、もう一人は行方不明、最後の一人は気がおかしくなつてどこかの病院にいるらしいよ・・・」

「恐わーい。それって本当の話なの・・・」

「「嘘に決まってるでしょ。噂話、都市伝説よ」・・・第一章おわ

り

第一章・種の絶滅（∞）（後書き）

誰しもが一度は興味を持つ未知の世界、恐怖を感じながらその好奇心を駆り立てる。ただ空想のお話で止まらず自分自身に置き換えたらどうだろう。「次は我が身!」想像力を膨らませ、話の展開に没頭し、登場人物と一緒に物語のなかに同化していく。次回もこの部屋でお待ちしております。

第三章・アンドロイドたちの夜(一)（前書き）

喧騒とした慌しい日常よりほんの少しだけ現実を忘れ、自由に想像を膨らませ空想の部屋へお越し下さい。お付き合いいただけるひとときの間、あなた様はどのような夢を見ていただけますでしょうか。

第三章・アンドロイドたちの夜(1)

それは、砂時計の砂が下に落ち時を刻むようになつて静かに正確に動いていた。

それは、私たちの知らない場所にありながらすぐ側で進化していくた。

それは、誰しもが皆気づくことなく確実に広がっていた。

それは、皆が注意していれば防げたかもしれない。しかし私たちの感覚は麻痺されそれを見過してしまった。

もう何をするにも遅すぎる。止めることなどできはしない。

それは、着実に一寸の狂いも無く私たちとともに動いている。

意識を失っていたようだ。気づくとそこは真っ暗な場所だった。かすんだ目を擦り、朦朧とした意識をはっきりさせようと眉間におさえた。何か様子がおかしい。傾いている。その斜めに傾いた壁際に倒れこんでいた。次第に暗闇に目が慣れてきた。

「こ、これは・・・どういうことだ・・・」

目の前に広がる信じがたい状況に顔がこわばつた。そこには割れた窓ガラスが粉々に散乱し、碎け散った窓からはひとしきり横なぶりの激しい雨が入り込んでいた。雷光が周りを照らし出す。そこは紛れもなくいつもの新幹線の車両のなかだつた。

「どうしたことだ・・・」

頭のなかが混乱している。今いる自分の状況が飲み込めない。呆然と壁に手を付きふらふらと立ち上がつた。ぱりぱりとガラスを踏む嫌な音が足元から聞こえてくる。

「列車事故・・・」

最悪の言葉が脳裏をよぎつた。他にこの状況から何を推測できるだろう。激しい雨が吹き込む割れた窓を見つめ高ぶつた神経を抑えていた。斜めに傾いた体を支えていた足元に何か触れるものがある。

雷光に照らされたそこには、ガラスの破片が無数に突き刺さったあのウェイトレスの女が目を見開いたまま死んでいた。虚ろな眼差しで足元に倒れている女を見下ろした。何度も自分の命を狙い、そして奪つていった女が先に死んでいる。この女はいつたい何者だったのだろう。車内に流れ込んだ濁流のような雨がその女の体をぬらしガラスの刺さった傷口から赤い血が尾を引き流れていた。

「山崎・・

足元の女を蹴飛ばし慌てて自分のいた座席へと急いだ。しかし傾いた車両と流れ込む雨が勢いよく水かさを増し足にまとわり邪魔をする。座席の背もたれを杖に必死に前へと進んだ。雷鳴が轟き雷光が惨たらしい車内を照らし出す。雨は激しく叩きつけ行く手を拒む。他の乗客がいないことも気づくこともなくようやく自分がいた座席にたどり着いた頃には雨水は胸元まできていた。

「山崎！」

そう叫んだとたんに足を滑らせ雨水の中に落ちてしまった。倒れた体を起こしたとき既に山崎の姿はなかった。雨水は怒涛のごとく人の背丈を越え天井いっぱいまで浸透していった。

「つ・・・

息をするのが精一杯になってきた。水かさはどんどん増すばかりである。不意に何かに足をとられ雨水の中に沈んでいった。よどんだ水のなか目を見開くとそこにはウェイトレスの女が妖しく微笑みながらガラスの破片が刺さった細い腕で自分の足首をきつく握つていた。恐怖のあまり叫んだ泡が大きく上がつていつた。這い上がるうともがいたが暗い底へと引きずり込まれていった。

あとには一定の間隔に並んだ誰も座っていない座席が雨水につかり沈黙を守っていた。・・・つづく

第三章・アンドロイドたちの夜(2)

冷たい雫が頬にかかる。永い眠りから目が覚めるように瞼をゆっくり開いた。真っ暗な場所だということは分かるが視界がぼやけてはつきりとしない。そしてかなりの湿気が体に付着する。

「ここがあの世といつところか・・・」

もう一度瞼を開じた。また冷たい雫が頬にかかる。間をあいて今度は体の感覚が目を覚ます。硬いベッドのようなものに横たわっているような感触。湿気とひんやりとした冷気が肌にあたる。かすかに息もしている。ここはまだあの世ではない。そう思った瞬間即座に目を見開いた。ぼやけた焦点をあわす。すると真っ暗な世界の向こうには長く伸びる鍾乳洞が広がっていた。またひとつ冷たい雫が落ちてくる。力を振り絞り硬くなつた体をやっとのおもいで起こした。

「洞窟・・・」

ここがどこなのか頭のなかが渦巻いている。自分は誰だ・・・。ここで何をしていた・・・。なぜここにいる・・・。まったく整理ができない。

そこへ小柄な背丈の人影が自分に近づいてきた。

「お気づきになられましたか・・・。隊長・・・」

その少女は確かにそう言つた。歳はまだ十代、どこかで見た顔だ・・・。

「隊長・・・?」

「お体の具合どうですか・・・」

少女は淡々とぎこちない様子で言葉を続けた。

「いいも、悪いも・・・。まだ頭がボーとしている・・・。経験はないが昏睡状態から目覚めた感じだ。それよりここはどこなんだ。君は誰・・・」

虚ろな目で少女を見た。

「ここは私たちの家。アジトです。外の世界はすでにやつらに占領

されている「

私たち・・・。アジト・・・。占領・・・。疲労困憊した麻痺している脳細胞では何を言っているのか理解できない。まるで答えが見えないクイズのようだ。

「・・・で、君は誰」

もう一度少女に聞いた。この質問だと答えはすぐに分かるだろう。

「私はあなたに助けられた」

複雑に答えが返ってきた。・・・つづく

第三章・アンドロイドたちの夜（3）

「当社をお選びいただきありがとうございます。お客様は幸運でございます。当社では他社に比べ最新のテクノロジーを使い、理想のお子様を提供させていただきます。まつ、それが我が社の売りなんですけど！それではお手続きへ入らさせていただきます」

「私たちはそんな時代に生まれた」
少女は遠くを見つめ語りだした。

「ご説明いたしますと現代医学の発展につれDNAが解明された今、ナノテクノロジー、ヒトゲノムなどの研究の発達により特許を取得すれば、私ども民間企業でも利用できるということです。まつ、難しい話は置いといてパソコンの前へどうぞ」

「私たちは生まれたのではなく造られた」
少女の目から一筋の涙が流れた。

「まずは外見。やはりぱつと見が大事です。お子様の理想の顔をサンプルをご覧いただき輪郭からご入力ください。幼児から大人に成長した顔がシミュレーションできます。次へに進んでIQですが、当社は基本的装備として誕生したときから有名大学卒までの学歴を脳にインプットさせていただいております。あとお客様希望でそれ以上の能力をご用意お付けいたします。最後に病気へのウィルス対策、いじめ、差別など悪影響を及ぼす思考、思想のカット、社会上困難と思われる性格、感情の削除は既にプログラム済みです。あとは区別のため男女どちらかお選びください。それで決定していただければ完璧なお子様のセッティングは終了でございます。次の段階はここでご入力いただきました情報をスーパー・コンピューターに送

り込み、そこよりデジタル化されたDNAが巨大な試験管へと流れ、そこで一ヶ月間お子様が育っていきます。その経過も観察できますのでご安心を。初対面の口には五歳ごろまで成長した姿でお渡しさせていただきます。また、流れとしましてはこのよつた形でござります。それではい今計のほうへ・・・

「しかし私たちは不良品だつた」

少女は力強く拳を作つた。

「お客様クレームは困ります。当社では5年間は保障期間で返品も承りますが、それを過ぎるとお客様のご責任のうえで育てていただいております。当社といたしましてはもつ管轄外で関わりのないことになります。そのことは最初の契約時にご署名いただいたいるはずですが・・・。まつ、細かいことを話しても仕方ございません。お困りの事でしたらなんとか対応させていただきましょう。お会計は少しお高くなりますが・・・」

「それで私たちは捨てられた」

少女は歯を食いしばつた。・・・づく

第三章・アンドロイドたちの夜（4）

大きく広がる鍾乳洞をぼんやり見つめ、まるで独り言のように喋る少女の話を板倉は目を閉じ聞いていた。体にたまつた疲労をゆっくり回復させながらようやく自分の名前は思い出した。

静かになつたので目を開き虚ろな視線を少女の屈んだ後姿に向けると彼女はうなだれ泣いていた。

「外の世界はどうなつているんだ」

板倉は静かに問いかけた。

「パソコンで人間を造りだす時代なんて馬鹿げてる。外の世界ではその不良品たちが感情もないロボット社会に暴動でも起こしているのか」

少女は涙で濡れた顔をあげた。

「不良品の人間は私たちを含めごく一部。社会は不良品とみなせばその場で反動分子とみなし、それを依頼した者とも処分させられてしまう。そんな味方のいない社会に向かつて暴動なんて起こせないわ」

少女の目からはまた涙が溢れ出した。

「不良品呼ばわりしてるけどおじいちゃんの時代なら私たちは性格も感情もある普通の人間よ！無感情、無感覚すべてないもの主義が当たり前のあの時代が狂つっていたのよ…」

少女の声が大きくなつた。

「あの時代……過去の出来事か……じゃ今ここにいるのはなんのためなんだ…」

「抵抗よ…」

少女は落ち着いた声で言った。

「そんな時代が何年も続いたわ。しかし侵略者が現れたの。感情を失つた人間たちは何も出来ずたやすく侵略された。私たちは同志を集め、おじいちゃんの頃の本当の人間社会を取り戻すためにレジス

タンスを作りいま戦つていのよ

また頭痛がしてきた。板倉は頭を押された。少女は板倉に背を向けたままそれには気が付いていない。

「どこの国が侵略しに来たんだ。いまの日本はどうなつている」苦痛の顔にゆがみながら言つた。

「日本・・。国・・。国なんてないわ。世界は1999年に一度滅んだのよ」

「なに・・！ いまなんて言つた！ ・・へりつく

第三章・アンドロイドたちの夜（5）

頭を抱え込みながら聞き返した。

「おじいちゃんから聞いた話。それから世界は統一され狂った時代になつたのよ。おじいちゃんが何故か謝つていたわ、“次の世代に託せなかつた”って」

少女はゆっくり振り返つた。

「大丈夫！」

少女は板倉の症状に驚き、駆け寄つて体に触れた。

「大丈夫だ。すぐに治まる。話を続けてくれ」

少女は板倉を介抱しながら話を続けた。

「統一された世界は今までにない完璧な社会を目指した。遺伝子を改良して自分たちの思いのまま動く新人類（ヒト）を造り出した。それが予想もしない侵略されるという悪い結果を生み出した。そしてすべての人間がやつらの家畜になつてゐる。それが今よ」

「それでどうなつた」

「無気力な人間たちだけの虚像の世界」

また意味の分からない答えが返つてきた。板倉は頭を抱えそう思つた。

「それではお客様のお子様を回収させていただきます。お客様は何もする必要はございません。私たちの誘導で強要ではなく自発的に自らの意思で処理地に行くことになります。そこからはもう一度と帰られません。あとは自然に自滅していきますから問題もございません。まつ、少しお高く付きましたが当社なりのアフターサービスです」

「親という者たちの身勝手な意思で私たちは回収され不良品の墓場といわれるところに知らずのうちに送り込まれた」

少女は板倉の胸の上に顔を埋め話した。

「さつきから、私たちといつているが俺も不良品に含まれているのか」

板倉は少女の背中をさすつてやつた。

「分からぬい・・。しかし隊長はその墓場から私を救つてくれた」

「俺はいつたい誰なんだ・・」

「あなたは私たちレジスタンスの隊長。敵に捕まつていたのを救い出した」

「敵・・。世界を侵略した相手か・・。いつたい誰なんだ」

「誰ではなく、何・・。それは宇宙から来た何か・・。隊長をさらつた敵は同じものとは限らない・・」

板倉は思考能力が薄くなつてきた。

「宇宙人・・・」

板倉は静かに深い眠りに落ちつていった。・・・つづく

第三章・アンドロイドたちの夜(6)

目が覚めると少女の姿はなかつた。眠つた時間はほんの数時間だつたが今回は悪夢から逃れたようだ。ぐつすり寝たようでだいぶ体は回復した。

横になつたまま天井に垂れる大きな鍾乳洞を眺めながら、少女の言つた言葉を頭のなかで繰り返し考えてみた。

「1999年に世界は滅び、新しい世界が生まれた。そして完璧な社会を作るために間違つた政策が打ち出された。そこで造られた人間たちが構成する硝子のようにもろい社会構造。そこに宇宙人が侵略し世界を乗っ取つた。……そして俺はパソコンで造られた新人類^{ヒューマノイド}の出来損ない」

そんな荒唐無稽な話をすぐには信じられなかつた。どう考えてもハリウッド映画だ。自分の頭のなかに残る記憶はまったく違う。……しかし・・・。断片的にしか出てこない自分の存在と夢の中のもう一人の自分・・・。これが誰かに作られた記憶だとすると無意識に社会に誘導され俺もまたその“墓場”に捨てられたのか・・・。また何故俺は“敵”に捕まつた。レジスタンスのリーダー・・・。頭のなかで整理するつもりだったが余計に混乱してまとまりがつかなくなつた。頭を抱えているとそこへ今度は大きな人影が近づいてきた。

「お気づきになられましたか・・・。隊長・・・」

その青年は確かにそう言つた。歳はまだ十代、知らぬ顔だ。

「ああ・・・。ところで少女はどこに行つた

「少女・・・」

その青年は不思議な顔をした。

「高校生ぐらいの女の子だよ。今までここにいたんだ」

その青年は困つた顔をした。

「高校生・・・? ここには隊長と僕しか居ません。今まで私は隊長

の護衛で外で見張りをしておりましたが内に入つた者はおりません。

そして我々の仲間には女の子はおりません」

そうすると彼女はいったい誰だつたんだ・・・。板倉はその青年にい

までの事をしゃべつた。

「隊長は世界征服を企む組織に捕まつていたのです。私たちは脱出計画を練り念密な計算の上時間は掛かりましたが、潜入していた仲間とチームで昨日救出に成功し此処へお連れいたしました」

「世界征服・・・潜入していた仲間というのは遠藤広子という女性か?」

「潜入後の名前は分かりませんが、美しく素敵な女性です。他の仲間と同様今もその基地で戦っています」

板倉の脳裏を遠藤広子の愛らしい面影がかすめた。

「借りを返す番だ。今度は俺が助けに行こう。今すぐに準備をしてくれ」

「お客様、当社の技術を利用されたいと・・・。それでは提携とかたちで取り組みさせていただきます。まつ、新しいプログラムは既に更新済みでござりますから・・・。ところでお客様は政府の方でいらっしゃいますか。当社は利益を重んじております。見返りが高ければ高いほどどんな人間でもお造りさせていただきます・・・。ご協力ありがとうございます」・・・第三章おわり

第三章・アンドロイドたちの夜(6)（後書き）

誰しもが一度は興味を持つ未知の世界、恐怖を感じながらその好奇心を駆り立てる。ただ空想のお話で止まらず自分自身に置き換えたらどうだろう。「次は我が身!」想像力を膨らませ、話の展開に没頭し、登場人物と一緒に物語のなかに同化していく。次回もこの部屋でお待ちしております。

第四章・第二戦争始まる（一）（前書き）

喧騒とした慌しい日常よりほんの少しだけ現実を忘れ、自由に想像を膨らませ空想の部屋へお越し下さい。お付き合いいただけるひとときの間、あなた様はどのような夢を見ていただけますでしょうか。

第四章・第三戦争始まる（一）

それは、徐々にしかも正確に私たちを蝕んでいった。

それは、気づいたときにはもう遅い。もう取り返しのつかない事態まで来ている。

支配はすでに始まっている・・・。

「いま、ここ日本にある宇宙開発センターより、いよいよ総合デジタル衛星の打ち上げが間近に迫っています。先端技術を駆使し日本で製造された世界に誇る最新衛星についても過言ではないでしょう。しかし今まで幾度かに渡つて反対派による抗議や妨害工作によりまして打ち上げが見送られ延期されておりました。今回はそれらの難題に屈せずほぼ強行に打ち上げが決定したと見ていいでしょう。この打ち上げは反対派の過激行動を避けマスコミにもつい先ほどまで伏せられており秘密裏に進められておりました。この打ち上げが成功すれば、テレビ放送は基よりパソコン、携帯電話、通信ゲームに至るまでありとあらゆる情報が美しく確実に、どんな場所でも何時でも我々の手にすぐに届くのです。この放送は衛星を通じて全世界中に緊急生中継しております！」

・・・数年前。

国際総合デジタル化が国際会議で決定され、通信衛星が打ち上げ日前となつた今、その目的に疑問を持つた男がいた。何故、その必要があるのか？急速に各国の国家予算の大部分を通信開発に費やす目的は何なのか？法律で定められる定義とは？一般には肩書きどおりの表面的な説明だけで、その裏には知られてはいけない“何か”が隠されいるように思えた。

「それで博士の考えは・・・」

「真の目的は宇宙人との交信だと思ひ」

「宇宙人・・・!？」

「突拍子もない飛躍しすぎた発想だと思つかね? とんでもない我々の現在の科学技術のほとんどは彼らのお蔭なんだよ」

「宇宙人の科学技術・・・? ?」

「よく雑誌やTVなどでタブロイド的に扱われているが、ほとんどはインチキでもごく一部真実が混じっている。しかし世間はそんなものは娯楽の見世物としてしか思つてはいない。それが奴らのプロパガンダなんだよ」

「奴らとは・・・?」

「よく、ほらそいついた娯楽映画にも陰で暗躍する組織が出でくるだろ? 影の・・・」

「政府・・・!」

「ご名答! 奴らはすでに宇宙人と協力し科学技術を向上させた。といつより盗んだんだな、これが。それははるか昔に宇宙船が墜落したことが発端だった」

「宇宙船! UFOですか!」

「もちろん! そしてその回収された宇宙船の未知なる科学技術をその国の政府は盗んだ。しかし墜落したのは1機だけではなかつた。他の国にもおつ落ちてた訳だ」

「別の国・・・」

「そう、何ヶ国、何ヶ所と数月を掛け意外とたくさん落ちてたわけ。そんなことはつゆ知らずその国としては秘密にしておきたいから、隠ぺい工作を使い知らぬ存ぜぬを突き通した」

「しかし話が世に出回り世間の関心を引き、敵対国家であろうが手を結ばざるを得なくなつた・・・」

「えらい! そこでよりいつそ高度な科学発展を目指し世界が協力してデジタル時代という名目で裏では新たなる未知の技術を手に入れんがため、宇宙との通信に踏み切つたわけだ」

「通信手段も宇宙といった長距離だとアナログよりデジタルのほうが鮮明に電波に乗り相手に届けやすい」

「頭いいねえ。君、どこの記者」

「いやだなあ、最初に挨拶しましたでしょ。フリージャーナリストの山崎涉です」

・・・つづく

第四章・第三戦争始まる（2）

「電波物理工学の望月博士。あんな人の意見を参考にしたのか？」最初にこの記事を売りにいったのは、ゴシップ、スキヤンダルなどで有名な雑誌出版社。正統派の出版社に持つても端から相手にされず、そっぽを向かれるのが落ちだ。博士の言葉にもあつたようすに数多くのインチキ記事があつたとしてもその内ひとつは真実がある。その言葉を信じたものの第一声がこれだ。

「あの人はなあ。胡散臭い人で有名なんだよ。学会からも煙たがられている。たぶん君はこういう記事を書くのが初めてだろうから知らないかもしだれんが、あの人言つた記事は手垢が付くくらい出回っているんだよ。他、持つていきな。他也無理だとは思うけどね」「そんなん。しかしこれが事実としたらえらいことですよ！」

「あのねえ、冷静に考えれば分かることだろ。そのありがたいご意見でも肝心なところが抜けてないかい。うちも偉そうなことは言えなければ、そういうのに陶酔する人つているのよ。まあ、うちはそれを売りにしているけどね」

頭ごなしに追い出され、ふらふらと歩きながら冷静に考えてみた。そういわれる所々説得力に欠ける。「もう一度会いに行くか・・・とも考えたが同じ話の上塗りだ。この博士の話を補足するよう別人の意見も参考しよう。

「宇宙人との交信？言語道断だね。あの人言ひそうことだ」

「では、教授はどのようにお考へで・・・」

「私かね。私は管理社会の形成だと思う

「管理社会・・・？」

「生まれたときから体の一部にバーコードを付けられ、登録されフアイルされる。それはすべてコンピューターが管理して衛星からは監視される。そう、打ち上げ予定のデジタル衛星こそがまさしくそ

れだよ」

「それは誰が何のために・・・？」

「よく聞いてくれた。ハリウッドの近未来をとりげたSF映画で出でくるだろう。影の・・・」

「政府ですか・・・」

「正解！奴らがだね・・・」

「で、今度は社会理論の豊島教授に聞いてみたって・・。君も人を見る目の人だねえ」

もう一度デスクに持つていった。

「やはり博士と同じ種類の人ですか・・」

「あつ、見る目あるじゃないの」

「話の中で影の政府が出てきたところから分かりました」

「まあ、こういう話は結局は昔からある根も葉もないゴシップネタなんだよ。そういうのに興味のある人種が多いから俺たちは食っているんだが、なんなら君の努力に免じてこの記事買ってあげようか。もうちょっと面白くして」・・・つづく

第四章・第三戦争始まる（三）

今となつては少しばかり後悔しているが断つた。小さな囲いに記事が載つたところで目に入るのも少なく、リサイクルゴミに捨てられ忘れ去られるだけだ。出来れば世間を巻き込み騒がしたいが、特集記事までには持ち込みたい気持ちはある。それだけの拘りと自信があつた。それ以上にこの政策に自分のなかで何か引っかかるものがあるからだ。こうなれば直接確かめにいこう。衛星の打ち上げの現場に乗り込むのだ。

「…といつ訳で、少しばかり先立つものを貸してはくれないかね…」

「先立つものってなによ…」

「先立つものといえば…お金でしょ…」

「お金つていぐりよ…」

「そうだねえ…。10万円ほど…」

そう言つた途端、山崎の顔におしぼりが飛んできた。

「あんたねえ！」

「だから…悪いなあと思つて焼肉も」ひそひそしてこるじやないか…

…

「1時間食べ放題のをね！」

山崎の目の前に座つているのは、小佐井螢子。数年前、国内線のスチュワーデスをしている萤子と空港ですれ違いざま知り合い、付き合いが続いている腐れ縁の仲である。

「この前の貸したお金も何に使つたか覚えている?」

「ああ、覚えているさ。火山の調査で北海道へ行つて…」

「何の成果も挙げられず、温泉に入つて帰つてきた」

「今度は南の島なんだよ」

「ぶり返したくはないけどね、出会つた頃のこと覚えている。自分

はやり手のフリー・ライターだとが言つて！結局あの時追つてた取材は何だつたのよ

「当時は大変だつたんだよ。突然消えた三姉妹の失踪事件を追つていってね。調査ももう少しのところで氣づくと童子に初めて借りたお金も消えていたんだよ。・・・塩タンおいしいね」

今度は箸が飛んできた。

「ごまかさないで！もう・・・私もたぶらかされたものだわ」

「まつ、そう言わずに。まだ食べる」

「もう時間切れでしょ。・・・しかたがない貸してあげるわ。その代わり私も連れて行きなさい」

その日の夕方、ボストンバッグを片手に一人は新幹線のホームに立っていた。

「なぜ新幹線なんだよ。飛行機のほうが速いじゃないか」

「飛行機はねえ・・・性に合わないのよ・・・」

二人を乗せて新幹線は博多へ向けて走り出した頃、雲行きが怪しくなつた空からは小雨が降り始めていた。・・・つづく

第四章・第三戦争始まる（4）

青い空に青い海。南国の植物が茂り、穏やかに温かい風が吹く南の島。バカンスには持つて来いのロケーション。しかしそこには場違いな建造物が建っていた。銀色に輝く発射台。存在感を露にする巨大なパラボラアンテナ。それに見上げるほどに立ちはだかる人工衛星を積んだロケット。デジタル衛星の打ち上げを目前に控えた宇宙センターである。

見渡すぐらい周りは海だけの孤島になっているこの島。以前は無人島だったがいつの頃から政府が関与してセンターの建設が始まった。関係者は朝と夕方1日2本で高速艦の送迎船で勤務している。勤務時間は交代制で24時間フル回転で動き続けている。

いまここでは打ち上げの最終チェックが行われていた。関係者は誠実に的確に作業をこなしている。勤労な姿にも映るが、見方を変えれば寸分の狂いもなく動くロボットのようだ。

そのままじめに取り組む作業員たちを監視カメラのモニターから見ている者たちがいた。

「第一段階は成功だな」

「いや、初期段階に過ぎません。まだまだこれからです。衛星が打ち上げられ軌道に乗つてからが第一段階の成功です」

「彼らはいつまであの状態が続くのだ」

「電波が発信されている限り半永久的に続きます。いまのところ島の範囲に限らさせておりますが、それが地球全体を覆う訳です」

「我々は大丈夫なんだろうな！」

「心配ご無用。彼らは自分が実験台にされていることも知らずいつも日常を送るのです。今までどおりこの島から家路につく頃には普通の人間になっていますよ」

「何のために」

「何のため・・・。君は新しい顔だね」

「政府調査室の者です。ここでの臨床実験が適切に行われているか
査察に来ました」

「臨床実験・・・。おかしなことを言つね。既に各国には通知が送
られて同意しているとは思つたが、我々は国務に乗つ取つて遂行して
いるのだよ。まつ、先の質問に答えよう。人類は次の進歩の段階に
来ている。それを世界じゅう国を挙げて協力し合おうということだ。
それこそ理想郷を築くために」

「理想郷・・・」

「人類の歴史のほとんどは無駄な時間を費やしてきた。それを解消
しようとしているのです。何故、同じ間違いを繰り返すのか分かり
ますか？それは余計ないらぬ考えを持つからです。それを強制的に
制御して社会を構成させるのが、我々の任務、全世界規模の大プロ
ジェクトなんですよ」

「人間をリモートコントロールするということですか・・・？」

「いや基本的には自分の意思で動きます。我々は少し脳に刺激を与
えるだけです」

「それで感情のないアンドロイドの出来上がり・・・」

「嫌な言い方をなさいますね・・・。新人類の誕生ですよ・・・」

「過去に何回か妨害を受けていますね。我々の計画が漏れています
ではないですか？」

「一部の過激な連中が勝手に騒いでいるだけです。心配はございま
せん。もしその飛び火が移つてデモが起こつても警察が鎮圧してくれ
ます。本当のところは誰も知ることは出来ません。内部精通者が
入れば別の話ですが・・・。ところであなたの名前は・・・」

「説明をしていた男の目が鋭くにらみを効かせた。

「失礼、申し遅れました。調査官の有沢高仁です」・・・つづく

第四章・第三戦争始まる（5）

「気持ちいい。南国ねえ」

「ああ……」

山崎涉と小佐井菫子は九州に着いた。しかし、山崎は浮かない顔をしている。新幹線のなかで見た「物理工学、望月博士死亡」の電光掲示板でのニュース。週刊誌に載つていた「社会理論家、豊島教授行方不明」の記事。この二つは偶然なのか？山崎は確信に迫つているように思えた。

「なにほんやりしているのよ。あつ、もしかしていま先つきの娘のこと考へてるの！」

「先つきの娘？」

「新幹線のワゴン販売の幼顔のウエイトレス。微笑ながらタダで週刊誌を渡したじゃない。あれって何かの合図！」

「はつ、ええ……」

「私以外にも新幹線の乗務員にも手を出してたの！乗り物好きの女が趣味なのね！」

「なつ、何言つてんの！？・・・

騒がしく痴話げんかが始まった。

「えつ、お客様さんあの島に行くの？関係者の送迎船は明日も明後日も毎日運航しているけどそれには乗れないし、一般人が行けるのは毎週日曜日だけだよ。それも抽選というのがあって当たった人だけらしいよ。・・そりや何も無しじゃ無理だよ。あそこに行くにはパースポーツがいるんだ

タクシーの運転手が言つていた。

「ちょっと、これからどうすんのよ！日曜日はまだまだ先だし、それに私たちは招待されていないじゃない。あなたには計画性がない

のよー！」

小佐井は顔を膨らませあてつけた。山崎は黙つたまま週刊誌を見ている。

「だいたい裏づけが必要だわ！ちゃんと調査しておきなさいよー！」
小佐井の愚痴は続いている。そのとき突然、山崎がニヤリと笑つた。
「パスポートあつたりして・・・」

ゆっくりと見せた。

「どうしたのそれっ！」

急に愚痴が止まつた。

「俺にも分からないよ・・・。この週刊誌のなかに入つっていたんだ」「ははあん、あの娘ね・・・。やっぱ何か関係があつたんだ・・・」「誤解しないでくれ。本当に知らないんだ。そんなことより日曜日まで日がある。それまで観光しようじやないか」「何言つてんの！取材するのよー！関係者の自宅調査から始まりよー！ところで泊まるところが無いからといってなんでラブホテルなのよー！」

痴話げんかは続いている。

同じ頃、暗く狭い場所で数名の者たちが密談を交わしていた。

「計画の準備は順調に進んでいるか？」

「はい、いまのところは」

「いよいよ次の日曜が除幕式だ。気を引き締めていけ。失敗は許せられない。油断は禁物だ」

「分かつています」

「失敗すれば・・・、我々世界中の人間に未来はない。奴らの思う壺

だ

「そつはさせません」

「衛星の打ち上げを断固としても阻止するんだ！」・・・ついで

第四章・第三戦争始まる（6）

・・・日曜日。

雲ひとつない晴れ上がりた空。心地よい南国の風。澄み切った潮の香りがする空気。最高のロケーション。バカンスにはぴったりの日和だがこの一人のカップルにとつては運命の日がやってきた。

「これが島への高速艇ね」

小佐井はまじまじと眺めた。

「さすが除幕式の日とあって大勢の人だね」

山崎は感心していた。

「そんなことより早く行きましょ。乗り込むのよ」

小佐井と山崎は島への送迎船である高速艇が出航する港にいた。

「あなたのく彼女ゝが渡してくれた怪しげなパスポートが通じるかしら」

小佐井は口を尖らせて言った。

「まだ疑っているのか・・・」

山崎は小さくなつた。

「当たり前じゃない。こんな顔写真つきの証明書！都合がよすぎると思わない？農と見て掛かればいいのよ！」

小佐井は頬もしく言つた。そんな小佐井を見て山崎も頬もしく思つた。

そんな一人の不安をよそに難なく通れた。

招待されている大勢の人ごみに紛れ、その足で船の底へと下りていつた。

「どこまで下りていくんだよ！」

「調べるのよ！何か出てくるかも知れないじゃない

かれこれ一時間隅から隅まで調べたが何も出てこなかつた。

へとへとで床に座り込んでいると汽笛が鳴つた。ようやく島が見え

てきたのだ。一人はロッジまで階段を駆け上つていった。

カモメが気持ちよさそうに間近で飛んでいた。潮風が肌に付着する。二人が見たその島はそれは優雅な楽園と思えるほど絶景なるものだった。

高速艇がその島の港に着くと数台のバスが待ち構えていた。

大勢の人の群れがそのバスに呑まれて行く。小佐井と山崎もそのなかの一人だ。バスは除幕式会場へと走り出した。

「打ち上げ楽しみだねえ」

「楽しみじゃないわよ！私たちは見ないの！失踪した従業員がいたでしょ。その真相を探るのよ」

小佐井と山崎は日曜日が来るまでの間、会社関係者を調べていた。どの家庭もごく普通の家族だった。しかし聞き込んだなかで一組の若い夫婦が突然居なくなつたという。話では急に引っ越ししたということだが、寮暮らしで給料もよく待遇もよかつたはずだが、何故いかななる事情があつたのかは分からぬようだ。

「何か此処であつたのよ。証拠をつかまなくちゃ」

「蓋を開けてみたら何もなかつたというのもあるんだよ」

「話の腰を折る人ね！見てなさい！私が陰謀を暴いてやる……」

「陰謀・・つて！？」

「あなたが言つていたことじやない！裏に隠された真実を暴き出すのよ……！」

小佐井は燃えていた。山崎は引いていた。・・・づく

第四章・第三戦争始まる（7）

バスは宇宙センターに到着した。招待された客たちは展望台に案内された。そこはパノラマになつており一望を見渡せられる。小佐井と山崎は全く逆の方向へと足を走られた。

「何を探せばいいんだ」

“関係者以外立入禁止”の部屋に片つ端から入つていけば何かに当たるわよ

二人の立場が知らぬ間に逆転していた。

「いつたい、・・・いくつあるんだ・・・！」

「分からぬわよ・・・。ほとんどが“関係者以外立入禁止”なんだもの」

“関係者以外立入禁止”的部屋は思つたより多かつた。今まで見た部屋はたいした手ごたえはなかつた。

「しかしおかしいと思わぬいか。いつもは此処は“関係者”だけのはずだよ。今日の招待客はそのまま展望台に案内されたから迷子にならない限りこんなところまで入らないはずだ。なのに何故、“立入禁止”的張り出しがされているんだ」

「それは私たちが入り込んでいるじゃない。張り出しの理由は・・・、従業員のなかでも別の“関係者”がいるんじゃない」

二人はすでに地下まで来ていた。天井にはあらゆる配管が走りそこに配線が張り巡らされ周りは訳の分からない機械が並んだ薄暗い場所だつた。

「なんだこれは・・！」

そこには何もない壁に覗き穴らしきものがあつた。

「みてみましょ」

小佐井が覗いた瞬間、その何の変哲もない壁が自動的に開いた。

「なんだこれは・・」

「その言葉二回目よ！ボキヤブラティのない人ね。だけどここは何・

・

そこには何台もの監視モニターが並んでいた。衛星を積んだロケット。準備を続ける作業員。観客の顔。それぞれのモニターにはあらゆる場所が映し出されていた。

「この画面見ろよ。有数大手企業の幹部連中だ。他に政府の人間もいるぞ。『関係者以外立入禁止』の意味はこいつらのことだつたんだ。ところでなにを見ているんだ」

「たぶん、これよ」

小佐井の見ている先には腑に落ちないものが映し出されていた。

「UFO・・・」

「なに・・・、なんなのよ・・・」

「これはスクープだぜ・・・。国際デジタル化時代は表向きで実際は政府と大手企業が手を組んであんなものを開発していたんだ」

「私たち大変なものを見てしまったんじゃない? 生きて帰れるかしら・・・」

「それより先に此処から出れるかどうかだ。俺はいまだんだんと眠くなつてきたよ」

「私も体がだるくなつてきたわ」

二人はゆっくりと床に倒れこんだ。その時すべてのモニターは二人の姿が映っていた。・・・つづく

第四章・第三戦争始まる（∞）（前書き）

明けましておめでたひいわくこます。

今年は皆様にとってよい年でありますよう願つておつます。

第四章・第三戦争始まる（∞）

「うう・・・」
山崎は眠りから目を覚ました。それは寝起きの悪い朝のように頭痛が激しかった。始めは自分がどのような状況でどんな状態であるのかは分からなかつたが、徐々に思考能力も動き出し真っ白い部屋で椅子に座っていることが分かつた。

「うう・・・！」

しかし身動きが出来ないよう腕と足に拘束ベルトで縛られていた。

「お目覚めかね・・・」

真正面の防弾硝子の向こうに一人の男が立っていた。

「もう一人はまだお眠るようだ」

山崎が横を見ると小佐井が同じように縛られ座っていた。

「茧子！」

「さあ、話してもらおうか。どこまで知っているのかを」
スピカーから流れる感情のない無機質な男の声が響き渡る。
「離してくれ！ 何も知らないし、あんたが何を言つてているのかも分
からない。私たちはただの招待客だ！」

山崎はバタバタと暴れた。

「まだしらを切る気ですか？ どうしてもお答えできないならいいから
も好きにさせていただきます」

「きやーーーー！」

小佐井が悲鳴を上げた。

「茧子ーー！」

「あなたが答えられない限り彼女に電流が流れ続けます。徐々に電圧を
上げていきますので丸焦げにならないうちにお答えください」

男の無感覚な声が響く。

「きやーーーー！」

小佐井の苦痛に満ちた顔が歪み、叫び声が轟く。

「やめろ——！」

「お答えいただけますか？」

「俺は何でもする。彼女だけは助けてくれ」

「答えになつていませんね」

男は電圧を上げた。

「きや——！」

小佐井の苦痛に歪んだ顔が山崎を煩わす。

「分かつた。何でも話す。すべてを言おう・・・だが、彼女だけは見逃してくれ。俺はどうなつてもいい。俺の命と引き換えに蛍子だけは助けてくれ！」

山崎は硝子越しの男に怒鳴るように言った。その時・・・。

「フフツ・・・」

小佐井が微かに笑った。

「フフフツ・・・、ハハハ・・・」

山崎は小佐井のほうへと顔を向けた。

「だから人間はいつまで経つても愚かなのよ」

「・・・蛍子」

小佐井は田を見開き山崎を見た。と、同時に小佐井の拘束ベルトが外れた。

「何年も付き会つて分からなかつたの？私もあなつたつて人が何年経つても理解できなかつたわ」

「蛍子・・・。どうしたんだ・・・」

「蛍子・・・。小佐井蛍子か・・・。そんな名前だったかしら・・・。名前なんていくらでも変えられるのよ。とにかく実験は成功よ。あとはこの男を処分して！」

「蛍子！どうしたことよ・・・」

その女は何かのスイッチを押した。その瞬間、山崎の意識は遠退いていった。

・・・数年後。

「国際デジタル時代の幕開けです。これからあなたがどこにいても、どんなときもあなたが求める情報がすべて手に取るように分かります！いつでも最新のニュースが分かるのです。人類の科学の有志がここにあるのです。自動車が空を飛ぶ時代は来ませんでしたが、それより有意義な時代がやってきました。理想郷へようこそ」

「はやく此処から逃げましょう！」

周り全体に耳を貫くサイレンがうなりをあげていた。

「私たちは招待客の一人だ・・・」

山崎はうわごとのように言った。

「招待客なんて一人もいなかつたんです。奴らが作り出した幻影だつたんですよ。奴らの罠です」

「茧子・・・茧子はどこだ！」

「もうこの基地はおわりです。さあ行きましょう」

男は山崎を抱え走り出した。

「基地・・・。ここは・・・」

「あとで詳しく説明します。それよりはやく我々の船まで脱出しないと・・・」

「船・・・」

「潜水艦です。もうこの基地は崩壊します」

「君は・・誰だ・・・」

「突撃隊の有沢ですよ。隊長」

「隊長・・・？」・・・第四章おわり

第四章・第三戦争始まる（∞）（後書き）

誰しもが一度は興味を持つ未知の世界、恐怖を感じながらその好奇心を駆り立てる。ただ空想のお話で止まらず自分自身に置き換えたらどうだろう。「次は我が身!」想像力を膨らませ、話の展開に没頭し、登場人物と一緒に物語のなかに同化していく。次回もこの部屋でお待ちしております。

第五章・我等が為に鐘はなる。—第一部／恐慌の時代—（一）（前書き）

喧騒とした慌しさ日常よりほんの少しだけ現実を忘れ、自由に想像を膨らませ空想の部屋へお越し下さい。お付き合いいただけるひとときの間、あなた様はどうのような夢を見ていただけますでしょうか・・。

第五章・我等が為に鐘はなる。－第一部／恐慌の時代－（1）

あの時・・・。

俺は一人街なかのベンチに座り肌寒い夜空を見上げていた。空からはゆっくりと白い雪が舞い振ってきた。クリスマスイヴらしい天からのプレゼントだ。町を行きかう恋人たちは聖夜ということもあり寒い冬の季節とは裏腹に暖かく見えた。それに比べ俺は絶望し今日の天候と同じく寒さに身を震わせていた。気がつくと隣に俺と同じ思いを持つ、しおらしい小さな影がちょっと座っていた。彼女は俺と同じく空を見上げ悲しい目で振つてくる雪を眺めていた。二人はこれといった会話も無く無言のままベンチに座つていた。言葉は無かつたが気持ちは通じていた。そして・・・、言葉の無いまま・・・恋人になつた・・・。

翌日、俺はいつものように山を削つていた。甘つたるいクリスマスなどと言つ言葉は俺には関係ない。俺に限らずすべての男たちに言えることだ。愛する女性と一緒に愛を語り合つた甘い時代はとっくの昔に終わつている。いまはすべての男たちは肉体労働に駆り出され、女たちは夜の肉体労働に勤しんでいる。昨日みた町を行きかう聖夜の恋人たちも一夜限りの虚像の幻影なのだ。しかし・・・、彼女だけは違つっていた。夢も希望も無い空虚な心にすこし温かさを感じた。

いまの俺の・・・、男たちの仕事は日本の象徴富士山以外、日本中のすべての山を削り落とすことだ。それがいまの政府の政策となつてゐる。目的は本州の真ん中に北海道から九州まで直通の高速道路と新幹線の線路を建設することだ。あと、何に使うか分からぬが各ポイントに大きなアンテナをぶつ建てるそうだ。あとになつて何を造ろうが俺が知つたことではない。いまは目の前にある山を崩すだけのことだ。それでいつものように日が暮れていく。労働は24時

間フル回転で動いている。だが強制ではない。8時間の三交代制で週に一回だが休暇もある。体調の具合が悪くなれば療養施設もある。日本全体が一つの会社になつているようなものだ。それに・・給料も悪くないと聞く。長く続く氷河期のような不況を打破するため、いまの政府が打ち出した打開策である。しかし、長く続けていくたびに将来に夢も希望もなくなつていく。俺たちはただ、終わりの無い回転する車輪をひたすら走るねずみだ。日本にはどれだけ山があるのだ・・・。いつになれば終わるのだ・・・。無限の単調な毎日が続いている。・・・つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4959s/>

New Age Beginning

2012年1月10日22時51分発行